

寄  
詳

改正月令博物考

三夏部

四

俳諧資料カード

年代

元

編者  
(筆者)

書名

改正月令博物考

備考

三夏部  
四

(下垣内蔵)

京市阿賀北五丁目三十三番八号  
 下垣内和人  
 電話三八三三七八五番  
 737



夏部目録

〇夏の天氣。占候。養生法等。凡下出

夏時令

此部は夏三月かゝる  
 時候のりりゝゝゝ

△夏日 三丁

△夏月 夏の霜 三丁

△夏朝 三丁

△夏夜 三丁

△夏野 五丁

△暑一△涼 五丁

夏州木

此部は夏三月かゝる  
 木のりりゝゝゝ

△夏草 五丁

△夏柳 六丁

△青花椒 七丁

△夏木 五丁

△夏山 五丁

△夏夕 五丁

△夏山 五丁

△夏川 五丁

△夏木 五丁

△夏山 五丁

△夏草 五丁

△夏柳 六丁

△青花椒 七丁

△荊葱

七

△馬齒莧

七

△苜蓿

七

△菘

七

△蓼

七

△藜

七

△根芋

七

△蓴菜

七

△海松

八

△水草の花

八

夏生類

此部より夏三月の種を  
季のしるしのものとあつむ

△蚊

八

△蚊遣火

八

△蚊柱

九

△蟻

九

△蝻

九

△蝻

九

△螢

九

△子子

十

△蝸牛

十

△蛞蝓

十

△夏鷹

十

△鷹鳥屋籠

十

△鵲

十

△蠅虎

十

△蠅

十

△鶉川

十

△青鷺

十

△通鴨

十

△鮒

十

△胡鮒

十

△水鯁

十

△水鯁

十

△干鱧

十

△干鱧

十

△洗鱸

十

△鱸

十

△鯽

十

△蟹

十

△鹽鳥賊

十

△魚菜

十

夏雜

此部は夏三月の種を  
乃雜事をあつむ

△短夜

十

△蚊帳

十

△扇

十

△團扇

十

△日傘

十

△蒲笠

十

△夏断

十

△夏登

十

△安居

十

△夏書

十

△新麥

十

△切麥

十

煮冷汁 煮九下 麥飯 煮九下

麥粉 煮九下 木布 煮九下

草物 煮九下 汗衫 煮九下

汗巾 煮九下 汗手拭 煮九下

必用 此部より夏三ヶ月の入用のこと知れぬ

夏養生 煮九下 夏天氣 煮九下

夏風 煮九下 夏雲 煮九下

夏霞 煮九下

夏時令

此部より夏三月の頃の時候の物とある

夏日

庭の面は日影ゆるらぬ夏の日ふるびくころりの風をよじしと

連 白雲小照そよまけ月影小宗祇

詩 夏日五字對句

九天鑪燼暖 避暑得深幽

六月玉聲寒 忘年遂久留

詩 夏日之詞 明 黃氏

深院塵消散 午炎篆烟如

夢晝淹々 奧フカキ殿院ハ各別

埃モ消散シテ暑 輕風似與荷

花約為送香来自捲簾

くト吹風ハ荷ノ花ト兼約アリテ花ノ白ヒヲ吹キ送リテ自ラ竹簾ヲ捲クタメニ吹タルヤウニオモハルトナリ

夏月

夏の霜もいづる  
新古今 頼政

庭の面もさかからぬ夕ぐらしの  
そくころをけなくすある月う那

為相

夫木 河上夏月 定家  
千五百番哥合 後京極摂政

静の雲けうけさし かくやまを  
まののこりさるふりさる月

夫木 河上夏月 定家  
たをぬくこと夜川のさるんさる

家集 夏夜曉月 仲正  
ありそめけうすくさるうたはれ

中てあり明の月成りるうる

詞 月そかふく 秋とまきこてあて  
ありの明やまを 神の縁を枝

はたさしぬのり奈もる 縁し ともさる

まろ。秋はかへ衣もすし 雲もぬ

清み。雲のつてはるさるおま。縁  
まの明や。たふすしく。まはる。明

妻さ。刀の程もさる。本れるもさる。  
夕すぐみ。光りすぐし。

連 文くもぬ光むすし 夕月夜 昌叱

非 夏月夜をさるすして二百支 其角

狂 みる枝のワをさるゆい色里ふ  
うさるもさるもさる月うる 素桐

○夏の月のさるしとくけと哥あり  
よし事かきつ月の影を霜に見  
たて夏霜も云 白樂天

詩 唐詩選 李太白  
司照平砂夏夜霜 此詩朗詠集三

詩 七字對句 詩礎  
床前看月光疑是地上霜

涼月照枕歌窓倦 水偏清

澄泉繞石波蕩漣 松下涼

山徑晚雲收獵網 足涼風

山徑晚雲收獵網 足涼風

水門涼月スイモンリヤウゲツ 桂漁竿キョウギヨカン 孤月涼コゲツスズレ

月三ツツリサホニウツル

スツキリスル

夏曉あつうさ

夜の明きことつり  
△(秀) 續後撰 定家

あけなりゆつるをみればあけの  
たのまにもしぬれぬまはるゝさ

夏朝

夜明とよも明て後も云  
△(秀) 玉葉 雅有

まふらぬはよのまひらげも人て  
あふらまふらわらぬをたぬあ

夫木 夏朝

為家

夏とあそとあそくはらふも  
ふさそ涼しとあけ乃る

夏夕あつゆ

△夏 (秀) 玉吟 俊頼  
△(秀) 松をふ夕涼する

浦人の心とあそくはらふも  
蚊のあけとせいらぬ夕多道す

夏夜

△(秀) 夫木 入道撰政  
友の池の汀よりす

かろし火の光も涼し夕やとの光  
六百番哥合 後京極撰政

うらぬの夏よりさぬは明け  
山やとくま守一をりれそ

同

夏夜短

定家

友のよいあふらぬをみれば  
むらぬはあふらぬをみれば

詞 老りも涼し。あそかすれい。夜  
のかつ火蚊をり火風涼し。あそ

らぬも夏とあそくはらふも  
月ものころの蚊の音。厚よりほ

俳 夏はあふらぬをみればあふらぬ  
あふらぬはあふらぬをみれば

夏はあふらぬをみればあふらぬ  
あふらぬはあふらぬをみれば

詩 夏夜五字對句

簾涼清露夜 山露侵衣潤  
琴響碧天秋 江風捲簾涼

詩 夏夜七字對句

夏ノ四 詩殘

池邊命海憐風月 寒翠幃

浦占回船惜芰荷 水亭閑

詩 夏夜之詞 明 揚慎

湘水魚鱗冷 簟文博山爽

篆罷鑪薰 魚ノオドルケニキヲ

伊ノクワリモキ 開牕對影延新月

坐愛金波洗火雲 月ニ對シ

オボヘヒヤ、カナル波モ日デリ雲ヲ

夏山 龜山百首 子雄

夏山の志をよみ本流不富りよめて

傳 夏不出て海思ん深山りも絶也

俳 夏山や草の心はひるもくもく

詩 夏山五字對句

山樹含斜日 秀木涵秀色

池風波早涼 奇峯出奇雲

詩 同七字對句 詩健

幽谿鹿過苔還靜 夏雲端

深樹雲來鳥不知 冷溪山

夏野 龜山 殿 為尹

夏の志をよみ本流不富りよめて

詞 卯の如く海を。又月夜を。夏を

俳 京川の笛を吹く夏時外 一井

連 海を渡る夏 紹巴 夏川 古今 新

海にさか秋やかひて初瀬川

俳月花や梅はくは美奈川百巻

夏川の香いなるあつたあつた重五

暑者一△涼一 暑氣とくひの  
六月に限ると

又同一事なり涼の奇連  
俳ハ六月の部ハ三十一日ヨ出と

夏草木 此部ハ夏五月ヨ  
こころと木と記と

夏草 (5) 新古今 藤原元真  
夏草のあつたあつたあつたあ

詞 志あふる。まびをもりくる。ぬ  
かた山ふくのほろ。谷はげま野

草のく心。群もが。あつたあつたあ

分迷入。庭かまふ。あつたあつたあ

海弟。まびる。あつたあつたあ

螢志げ。あつたあつたあ

合上虫のあつたあ 里人 結ふあつたあ

連武義のあつたあ 民のあつたあ

俳 夏草やあつたあ 古松に宿  
あつたあつたあ 松のや 思貫

夏木 夏木立△若葉紅葉。結  
若葉△嫩葉 柳のじ

玉葉集 院  
あつたあつたあつたあ

俳 菱垣のあつたあ 鉄山  
あつたあつたあつたあ

詩 夏木五字對句  
あつたあつたあつたあ

拂暑携清賞 緑樹溪邊合  
あつたあつたあつたあ

披雲坐緑陰 清山郭外斜  
あつたあつたあつたあ

詩 全七字對句 詩礎 漢々水田飛白鷺 日月昏



陰々夏木 嘯黃鸝

僧院深

斜陽映閣山當水

樹松雲

微綠含風 樹滿天

水殿開

詩 夏木之詞

唐

王昌齡

綠樹重陰蓋四隣 青苔日厚

自無塵 夏木立クロミシゲリテ

頭箕踞長松下 白眼看他世上

人 合々人ノ外ハ交ラ

夏柳 葉柳 柳かひらに秋ハ

神 柳之排云 万葉に佐岩木花とあり

新勅

重政

秋ハの柳とねもきまのけ

非 柳 秋ハの柳とねもきまのけ

青素椒 巴椒 蜀椒 但州朝 倉谷より出ふもの

甚美と丹波丹後ハ其枝を

州津輕の産大めで氣味勝る

山椒ハしやてつる時の妙術 灰を

甜ハへハ又男ハハ女のゆめハ

柚山椒 所々稀ハあり 枝葉

山崖椒 葉大

細花ハハのミミ実ハ緑豆

春葱 初生針のミミ



蚊之煙や塵如き煙のさめ云 其角

狂はみあらしもあはれ人のいも生るる

危しかるにささやくふべき 宗明

白鳥向炎時嘗々應苦饑 昼ハ

カクレテウヘ 進身因暮夜得志入

簾帷 一夜ハ已カ時ヲ得タリトシ

嘘吸吾方困飛颺汝自嬉 吾等

風一朝至倏忽竟安之 今ニ

フキキタラハスゴクト 秋風

何処ヘカテントイフチリ

蚊遣火 俊頼

かゆ火の煙ふさふさごとすむれ

あめじりやききあふら

詞形を竹ひた煙がききや。夜あ

く。まそふらあは蚊のせむじ

うさひさひさびさふ煙。津の香蚊の

聲遠きあびく。さびし里。あ

せれた。夕白の。たび森

非蚊を火やあつる方は老翁より其角

狂蚊より火の巨燧の内かへりあり

あぶら火のすまかづいり架柳

蚊柱 蚊の多く集まると云 非 蚊

蜻 蛚子。蝶子。山中。非 遠縁の

蛭 水蛭の水中よりあり草蛭

笄蛭といふ者あり状如うがい乃

の 蛭 蛭の形や船よ虫

新蛭。山蛭。流蛭。異名 丹

鳥。夜光。霄燭。丹良。

んれや大い託のその虫る。道明

んれや大い託のその虫る。道明

んれや大い託のその虫る。道明

暉夜燐。夜半。燭燿。

⑧ 夫木

知家

すまの初月ふやるとるやまゝもるん  
こゝろまでこゝろぬまゝのほゆ

宝治音首 水邊堂 頼氏

くれあけのこの下くまきいしじの  
みくしりしりりりりりりりりりり

家集 海辺堂 清浦

そぬ風ふるふくのまはけはありそぬ  
こゝろぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

夫木 樹下堂 隆祐

ととと河のそぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
こゝろ秋かゝるまじりりりりりりり

夫木 猿堂 俊頼

あしあふやこゝろばけのあつこま  
たゝたゝたゝたゝたゝたゝたゝたゝた

家集 螢火乱風 仲正

風あけいりあつる風ふるわして  
まのひあつくよりのまじり

常盤井哥合 螢照細流 仲正

まじりのちを各河をこゝろぬぬぬぬ  
こゝろぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

家集 河辺見堂 好忠

しれ木のふもあつはあつりりりりりり  
まじりあつりりりりりりりりりりり

長久哥合 漆河堂 経信

いさり火の浪るこゝろとよゆはも  
そあつりりりりりりりりりりりり

同 行路堂 経信

初これぬはこゝろすこゝろぬぬぬぬぬぬ  
まじりやせはしあつの中を

同 古寺堂 経信

今そあつあつの林りりりりりりりり  
そゝりりりりりりりりりりりりり

夫木 螢火透簾 寂蓮

あつこれらふせぬまのむしりりりり  
あつりりりりりりりりりりりりり

後拾 沢堂 公雄

花さるふいりりりりりりりりりりり  
こゝろぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

玉葉 叢同堂 左大臣

吹をそぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
こゝろぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

夫木

江螢

家長

つらつらひぬるくし小舟とたへる  
つらつえのあつるおそ持ひゆく

夫木

羨螢

光俊

日くらぬを社の清をゆくゆく  
こつぐおりのややもらん

拾玉

螢火違簾

慈鎮

おそくはるる螢のすれりけみ  
まよおぢのまのまをけり

詞

新てしはひらう。ゆゆる。昔の  
花ぶ。さへぬ。はゆぬ。けらぬ。あひ

らるる。月日ふきこく。暁うけ  
うらさ。夕ゆ。庭こく。は。夕。あ。

月みぎら。夜涼く。あ。う。く。玉  
の雲。よひの雲。あ。く。あ。あ。

さく。あ。あ。さ。井。小。新。あ。あ。  
上。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。  
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。



詩 全

唐 李嘉祐

映水光難定 凌虛體自輕

水面二重カゲツツ光イツレノ処

然トコロ 夜風吹不滅秋

露洗還明 風フケル螢火ノ燈

却テ明光ヲ倍ス 向燭仍藏

燭投書更有情 火ニムカヘバ

少シク夕ヨリニナルナリ 猶將

流亂影來此 傍簷楹亂

影ノ簷クチヘ搯

詩 全 唐 鄭谷

故國無心渡海潮 老禪方丈

倚中條 出テセンヲ子リテタル 夜

寂寥 夜アメヤミ禪室ヘテラシ

事 螢 螢盛照書 晋ノ車胤ハ

ニシテ書ヲ讀フヲ好ム家貧

シテ常ニ油ヲ得ルヲ得ズ

夏ノ夜螢ヲ集メテ 緝ノ囊

ニ入レ盛リテ 昏ヲ照シテ讀ケ

ルト 為丸却矢 務成子螢

漢ノ劉子南其方ヲ得テ 調

合シテ佩ナルニアルトキ 虜ト

戰フテ 圍メレケルトキ 矢ノ來

ル雨ノ如クナリシカ 劉子南カ

馬ヨリ五六尺バカリニナレバ 其

矢地ニ墜テ子南ニ中ラズ 傷

ナカリシ故 虜ノ兵モフシキニ

思ヒ神ナリトシテカコミヲ 解

去リシ 螢火丸 一名冠將丸

トナリ 又武威丸ト

一名冠將丸

各一雄黃雌黃兩 殺羊角

各一雄黃雌黃兩 殺羊角





牛のぶくろひあるていなり。土

⑤ 夫木

寂蓮

牛は子ふゆまうるを産のかさう

⑥ 蝸牛角うり多よび何じ 芭蕉

白鹿や角の月とあかづりうり嵐雪

⑦ 蛞蝓と承をいふかづりうり訥子

△ 蛞蝓

附蝸 土蝸 鼻流蟲 蛞蝓螺 托胎蟲 陵蟲

○ 附蝸。土蝸より小かづりうり小似と

多故く。蛞蝓螺も引つりゆくかこ

ちひくづり。鼻流虫へんかづりうり

うりの出るといふ。托胎蟲。陵蟲

⑧ 蛞蝓の初来ふとく故を香移竹

夏雁鳥

夏はうら鷹ふ小鷹

雁鳥屋籠

羽を替せせん たい小鳥屋へ放

り置く四月埒入の所を委一

⑨ 埒はう毛糸とるまやと埒不埒

鵲

正字詳あり大小の二 種あり大ありのい頂よ

白き冠あり小多

蠅虎

蠅子 蠅子

⑩ 蠅 蠅蛆とも各種類多一中に

赤頭と忌と淵明と文よ見あり

⑪ 非ともこのみよ産まさいく其角

鶉川 鶉飼 鶉舟 陸鶉

⑫ 取せ未啾よ下らざる時其のをど

みせば則ち自ら出と鶉はひみ

され漁人の手おてみよまことと

魚を吐く又妙あり濃州岐阜

至て妙を得よ漁人多一

度よ十四奴を放つりのあり

⑬ 新古今

前大僧正慈圓

物何れあれくぞなるそのぬの

八十うら川の文雲乃を

同 弁蓮法師

うかいぬるぬるうまぬるんや  
結ん進ゆくかろ火のうま

夫木 光俊

け川ぬ小夜を中めじ桂人  
うまぬるぬるぬるぬるぬる

拾遺愚草 雨後鶴川 定家

うかい舟村ぬるぬるぬるぬる  
まゝるぬるぬるぬるぬるぬる

草根 遠近鶴川 慈鎮

うら川のせむれ足代本うらぬ  
ありぬるぬるぬるぬるぬる

詞 夜川 夜川の舟 夜川の舟 舟 舟  
川うら火うらぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

うらぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

詞 松浦川。宇治川。玉し由川。  
夏川。とや成。こまき成。沢水  
いありあり。水車。養。深。

俳 山考の勢。つる鮎。松浦。とや成

狂 けいけいし。いほのせ。じけ。の。ひ。あ。い。ん

生 ぬ。と。し。又。あ。こ。ら。ふ。と。り。う。 満水

○食。は。ぬ。日。の。め。い。ま。ま。生。し。と。り。あ。ま。し。く。し。う。な。り。年。魚。と。ふ。秋。ハ。あ。と。ろ。く。あ。ま。り。あ。ま。り。た。り。年。魚。と。ふ

鮎 梅豆羅國 日本紀神功皇后紀 前于島小河小鮎を

事 故 梅豆羅國 今松浦と云ひ誤り

釣 多ふ。ぐ。り。し。き。物。入。と。を。其。所。を

梅豆羅國と云今松浦と云ひ誤り

胡 鮎 子あり

水 鮎 潮はひじ

内 是と切流し漬ふりしと

りり即水ある事の事なり

水 鱧 桶は水とせしへ魚は

つる大坂より大和

へ送る大和川を船を曳乃

るこの故は水とせしへりり

干 鱧 海鰻。十頭つゝる志

らやりにあるりりり

干 鰻 非 鮎とせしめぬ腹も

干されて干脈は 青藍

魚 藻 下り春秋へ春は委し

下り春秋へ春は委し

洗 鱧 川は在りのと佳と守三

四寸とせしへりりり

覆 魚 軒は作りありひ浄を

敷酒よて食入是と洗とと云

鮎 處々の谷川はあり其

声五里五里と云

鮎 鮎 鮎 鮎 訓と

名物 江州の鮎。濃州の

鮎。和州吉野鮎。是と釣瓶鮎

と名つゝ。城州宇治鰻。鱧。撰

州福島の小鮎と云ひりりり

つる。和州今井の鮎。越前

引田今庄の鮎。これ等

いふ名物なりりりり



流風入坐飄歌扇

扇影飄

瀑水當階澣舞衣

逐酒來

勻教時交合歡扇

共徘徊

追杯乍舉石榴裙

涼風前

伏翼

扇のりく蝙蝠を見て

草子小まどふくかこひき

の去筆のかつりかけり

團扇

思ひと菴のうらと抄耶十

狂ひの拍子たぬけうらと

詩 團扇之詞

唐

劉禹錫

團扇復團扇奉君清暑殿

不相見

鷺女蒼々華蟲編明年入懷

袖別是机中練

日傘

編笠

結夏

夏断

夏断

も夏はありの内の行状をり夏も  
り内ハ佛は花を供し無縁の区靈面

解又聖經の類を書寫せ俗家  
も夏断といひて房車酒肉等慎む

者あり△安居といひ形心靜攝  
成安といひ要期此は住まると居ま

新麥 早きものハ三月此ま  
れと記物ハ五月の内ま

切麥 △冷麥。天寒の時  
ハ温鈍をりらひ天

熱の節ハ冷麥成りらもある  
制ハあるハ寒温の違ひのま

煮冷 △冷汁。夏ハ食物又  
ハ汁こそ器へ入を

井水おはあれたるくひ人  
たると記食ふ之にぎぬとも云

麥飯 狂をり侍てま位にりて  
をるま禪ハ出まぬ夏

麥彩 非粒くの汗をいたく  
ま粉の耶 土

木布 布のいまこきくまの  
のをまきむらとひ

單物△汗衫 官家の下  
着とつら

或ハ袖もるとひとつら俗  
ふら襦袢なりたぐひなり

汗巾 △汗拭△汗手拭 汗  
をぬくハ手巾なり又

夏の用具ハひつら  
非ハハ幸津るも口ハ汗拭 貞九

必用 此部ハ夏三月の入  
用の事と数多あつむ

夏養生 素問云夏三月ハ蕃秀  
と云天地の氣交り萬

物繁茂とて夜ハ卧 早ハ起志とて  
怒を幸となく英花とて秀となくめ

天氣ハとてハ幸と得てむこれ  
夏ハ氣の應むら處とて養生の道

○水とのこ水ハ洗浴とて事とて○お  
つ石の上ハ坐卧とて熱とてハ養を



